

第4章 まとめ

1 古代・中世の土器祭祀遺構 一大分県下の例から

1 はじめに

古庄屋遺跡からは土器埋納遺構が2基（SX2，SX3）検出された。このほか、掘立柱建物跡の柱穴の一部からも完形土器の出土（建物1，建物4，建物6，建物7）が確認されている。このような土器祭祀遺構は、出土状況などにいくつかの形態があるものの、大分県内でも古代・中世の遺跡から多数確認されている。これらの遺構については、多くの場合、地鎮などの祭祀に係わるものと理解されているが、時代的な変化や形態的な差異が何を意味するのかなど、その実態は必ずしも明らかにされていない。

県外では、この種の遺構について早くから注目されており、いくつかの検討がなされている。最初は、寺院などの宗教施設に係わるものを取り上げられてきた（註1）。これらは古代から近世にまで及ぶが、やや特殊な遺構であるという感があり、広く一般的に扱われることは少なかった。その後、都城遺跡や広く一般集落遺跡での例が検討され、これらのもつ様々な要素や問題点が整理された（註2）。加えて、各地域での細かな集成・分析も行われ、その実態が明確にされつつある（註3）。

小稿では、大分県内における古代・中世の土器祭祀遺構を集成・検討し、今後の研究に向けた基礎資料とすることを目的としている。今回取り扱った土器祭祀遺構は、すでに報告書等で報告されているもののうち、土器を意識的に埋納したものやそれにちかい状況で出土したもので、祭祀に係わるであろうと思われるものを取り上げている。

以上のほかに、同様な性格をもつ遺構として銭貨単独などの土器を含まない埋納遺構がみられる。これについては今回取り扱っていないが、土器祭祀遺構と強い関連性があると推察されることから、稿を改めて検討する。

2 土器祭祀遺構の例

大分県内の土器祭祀遺構について、管見のもののみを以下にまとめた。その状況から大きくⅠ、Ⅱ、Ⅲ類の3タイプに分けて検討する。

(1) Ⅰ類

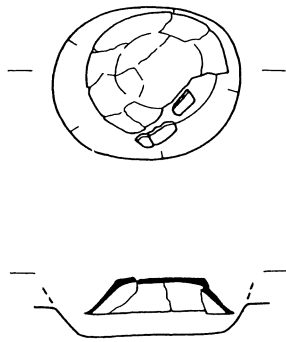
Ⅰ類は、集落外で確認されるものである。これらは明らかに日常の生活の場である集落とは離れた場所に位置するもので、このような場所が意識的に選ばれたものと考えられる。

・上牧ノ内Ⅰ遺跡（註4） 遺跡は、大分市東部を流れる大野川左岸の丘陵上にある。標高は約126mを測り、周囲は急峻な谷に囲まれる尾根上に位置する。土器は尾根上平坦面の約25×16mの範囲から出土しており、複数のブロックが存在すると考えられている。土器埋納などに係わる明確な掘り込みは確認されておらず、本来は尾根上に置かれていたものが、一部は斜面に流れ落ちるなどしているものと理解されている。出土土器は小破片も含め6565点を数え、その多くが坏と小皿である。時期的には、8世紀後半から10世紀初の約100年間にも及んでおり、土器を尾根上に安置する行為を長期にわたり続けてきたことがうかがえる。

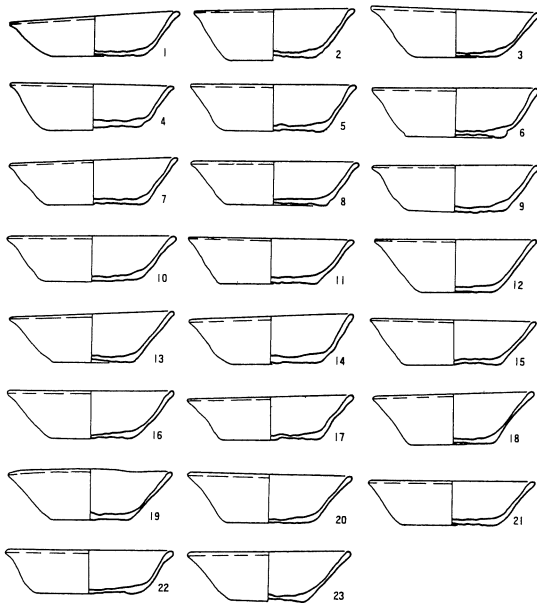
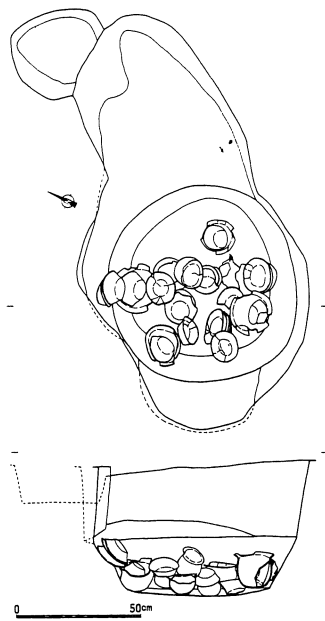
同様な立地と土器の出土状況を示す遺跡は、上牧ノ内Ⅱ遺跡、一方平Ⅲ遺跡などがある。いずれも、上牧ノ内Ⅰ遺跡と近接した場所にあり、同様な性格をもった一連の遺跡と考えられる。

・虫喰谷遺跡（註5） 遺跡は、上牧ノ内Ⅰ遺跡など同じ丘陵内にある。標高は62mで、松岡丘陵を深く開析する挾間川を見下ろす位置にあり、上牧ノ内Ⅰ遺跡などとは挾間川が流れる谷を挟んで対峙する関係にある。立地する場所は、挾間川河床との比高差約15mを測る丘陵の裾部で、緩やかな傾斜地となっている。遺跡からは、縄文時代の遺構・遺物が極めて少量出土しているのみで、土器埋納遺構を除いては、同時代の遺構・遺物はまったく確認されていない。土器埋納遺構は、完形の土師器坏1個体の底部を上にして埋納したもので、9世紀代に

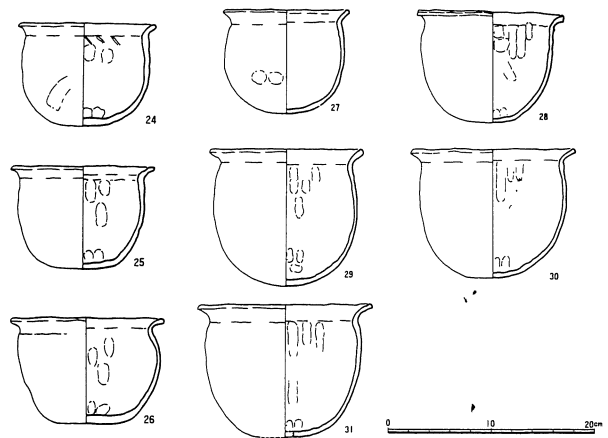
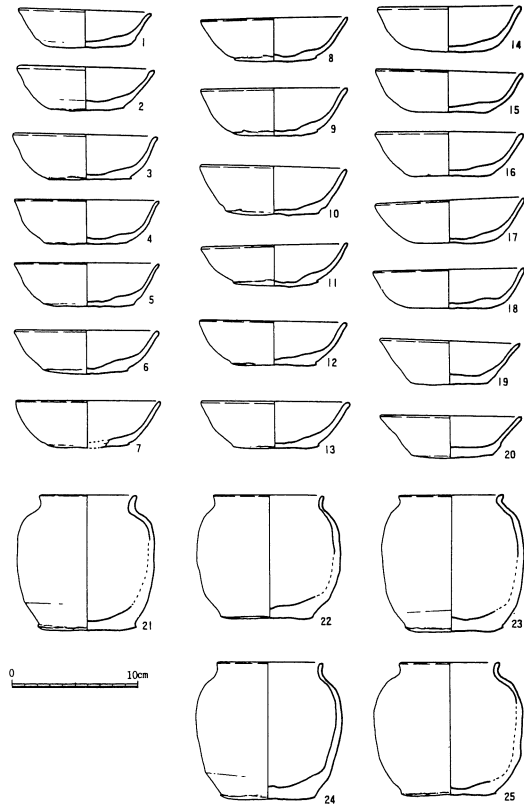
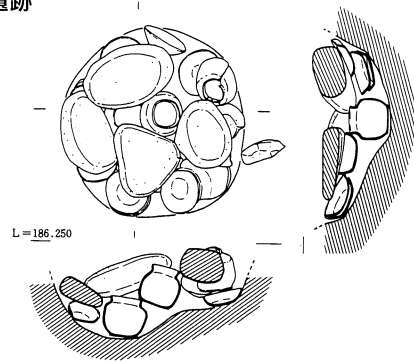
虫喰谷遺跡



信重遺跡

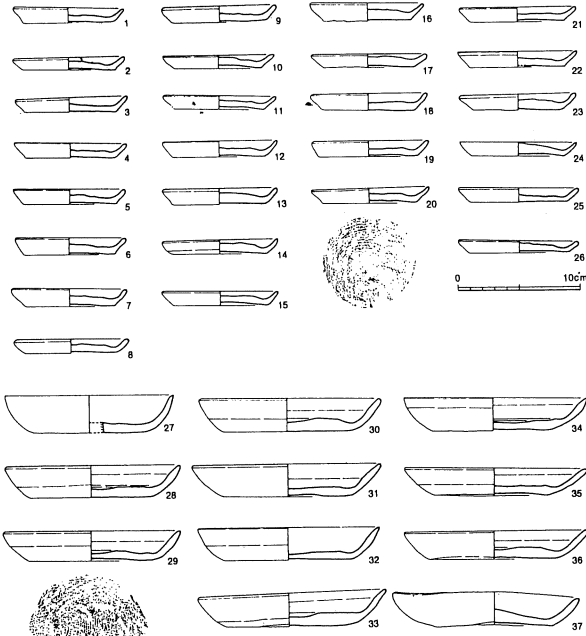
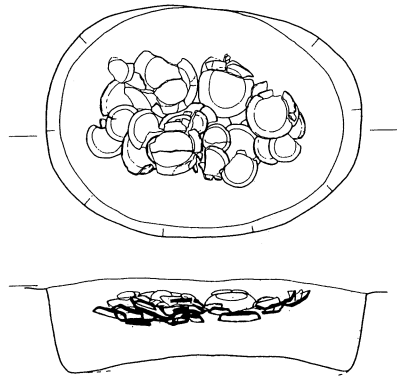


古市遺跡

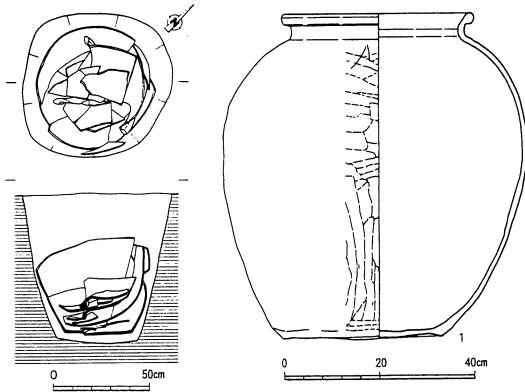


第126図 大分県内の土器祭祀遺構 (1)

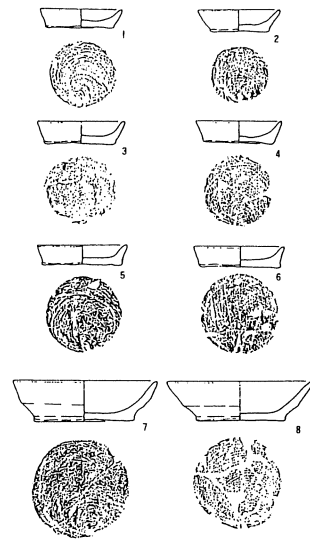
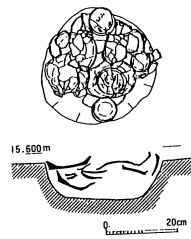
六田遺跡



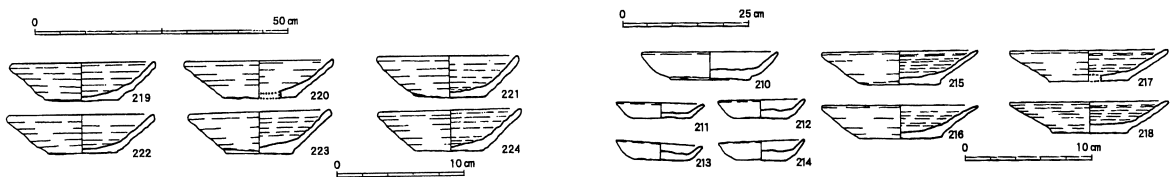
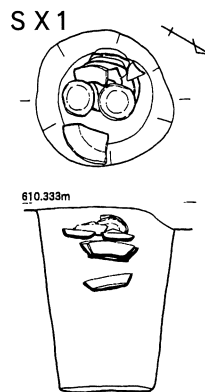
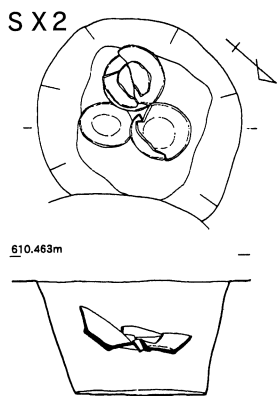
小路遺跡 (香々地町)



植田市遺跡



小路遺跡 (久住町)



第127図 大分県内の土器祭祀遺構 (2)

位置付けられる。

(2) II類

II類は、屋敷内でみられるもののうち、掘立柱建物を構成する柱穴以外の遺構に土器を埋納するものである。

・久末京徳遺跡（註6） 遺跡は安岐町の山間部である朝来地区に所在する。時代的には8世後半から9世紀後半に及び、古代安岐郷の中核部から遠く離れているにもかかわらず、建物の整然としたコの字状配置や緑釉や塩壺など希少な遺物がみられる。土器祭祀遺構は、須恵器や土師器の壺が単体もしくはそれにちかい状況で埋納されるSX1、SX2、SX3、土師器坏が数個から30数個出土するSK6、SK8、SK9、SK10がある。これらはいずれも9世紀代の所産で、建物がコの字状配置された中央空間部に位置する。なお、SX1、SX2、SX3については、壺内の脂肪酸分析で動物性脂質が検出されており、胞衣埋納遺構の可能性をもつ。

・信重遺跡（註7） 遺跡は香々地町に所在する。古代伊美郷の中核をなす竹田川下流域の平野に位置しており、石帯などの出土遺物がみられる。土器祭祀遺構はSK19で、完形の土師器坏23、土師器甕8が埋納され、意識的に砂を用い埋められていた。9世紀後半のもので、建物がコの字状配置された中央空間部に位置する。

・古市遺跡（註8） 遺跡は朝地町に所在するもので、一万田川左岸の丘陵裾部に位置する。部分的なグリッド調査であるが、土師器坏20、土師器壺5が埋納された遺構が確認されている。しかし、本祭祀遺構が屋敷内のどのような位置にあるのかは不明である。時期は9世紀代か。

・六田遺跡（註9） 遺跡は国東町の田深川左岸に位置するもので、12～14世紀に及ぶものである。1号土壙からは完形の土師質土器坏11、土師質土器小皿26が出土している。調査区の関係で屋敷地全容は不明であるが、屋敷地の東南隅に近い位置である可能性が高く、建物とも近い位置にある。

・深水邸埋納遺構（註10） 三光村に位置する当遺跡は、犬丸川右岸に形成された河岸段丘上に位置する。遺構は庭園造成中に発見されたもので、備前焼大甕の中に鉄刀、和鏡、鉄鉞、鉄鎌、鉄鍋、金輪などとともに土師質土器小皿58が納められていた。時期は14世紀前半に位置付けられる。

・小路遺跡（註11） 遺跡は香々地町の見目川右岸に所在する。13世紀から16世紀にかけての遺物が出土しており、遺構的には16世紀の建物などが確認されている。ここでは備前焼の甕が単独で埋置されているSX1が検出された。甕は13～14世紀に位置付けられるものであるが、内部からは何も出土しなかった。深水邸埋納遺構のような例も考えられるが、墓や貯蔵用施設の可能性もある。

・植田市遺跡（註12） 遺跡は、大分市の七瀬川左岸に展開する玉沢地区条里跡内に位置する。幅広い時期の遺構が確認されるなか、一辺60m程の方形を呈した屋敷跡が確認された。土器祭祀遺構のSK3は、屋敷跡の北西隅に近い位置から検出された。土壙内からは土師質土器坏7及び土師質土器小皿10が出土し、時期は15世紀後半に位置付けられる。また、屋敷地北東隅からは備前焼を埋置したSK4が確認されている。内部から白歯1本が検出されており墓の可能性もある。

・猪野中原遺跡（註13） 遺跡は大分市の乙津川左岸の丘陵上に位置する。屋敷地は南北50m、東西40mに溝を巡らし、南側に長方形の張り出し区画を有する。土器祭祀遺構はSX050、SX005、SX065の3基が検出された。SX050は屋敷の中央部に位置するもので、土師質土器5点に銭貨が3枚ずつのせられていた。SX005は屋敷南端ちかくに位置し、隣接して建物もみられる。土壙からは土師器碗1、京都系土師質土器4が出土した。SX065は屋敷の北西隅近くにあり、土師質土器坏が出土している。以上の時期は16世紀代に位置付けられる。

・小路遺跡（註14） 遺跡は久住町にあり、大友氏の有力家臣である朽網氏の居館であると考えられる。土器祭祀遺構はSX1、SX2の2基が確認され、いずれも館中央部近くに位置する。SX1からは土師質土器坏などが9点出土した。建物を構成する柱穴と接するようにみられるが、建物との関係は不明である。SX2から出土したのは土師質土器坏6である。位置的に複数の建物と重複するが、その関係は不明である。時期は15～16世紀に位置付けられる。

・古庄屋遺跡 SX2、SX3の2基が確認された。SX2からは土師質土器小皿が6点、SX3からは土師

質土器小皿が8点各々出土している。位置的には、屋敷地の北西部にあたる。両者の時期は、15世紀後半から16世紀にかけてのものと考えられる。

(3) Ⅲ類

屋敷内の掘立柱建物を構成する柱穴から出土するものである。しかし、掘立柱建物跡の柱穴などから完形の土器が単独で出土する場合については、出土状態などが詳細に報告されていない場合が多く、今回の集成ではこの種のものがかなり漏れているものと思われる。

・瀬戸遺跡(註15) 遺跡は玖珠町の丘陵上に位置するもので、2棟の建物柱穴から土器が出土した。6号掘立柱建物は南北に主軸をもつ2×1間の建物である。規模は20㎡余で、北東隅と北西隅の柱穴から完形土器が検出された。北東隅柱穴から白磁合子、土師質土器小皿が1点ずつ、北西隅柱穴から土師質土器坏が3点出土した。7号掘立柱建物も南北に主軸をもつ2×1間のもので、建物面積は28.4㎡である。土器が出土したのは北東隅柱穴で、土師質土器坏が4点検出された。両建物の土器とも12世紀後半から13世紀にかけてのものである。

・安平遺跡(註16) 遺跡は中津市に所在し、掘立柱建物4棟などが検出された。このうちの1棟には建物内に鍛冶炉がみられる。建物を構成する柱穴から土器が出土したのは建物1である。建物1は本遺跡で最も大型の建物で、四面に底を持ち身舎面積62.15㎡の規模を有する。土器は身舎を形成する3本から出土したもので、いずれも柱穴底面に完形のまま置かれたような状態で出土している。出土土器は土師質土器坏と小皿で、時期的には14世紀後半に位置付けられる。

・伐株山城跡(註17) 遺跡は玖珠町の玖珠盆地を望む標高700mの山上に位置する。山上には一辺20～50mを測る方形の土塁遺構が7基みられ、各土塁遺構の中に掘立柱建物が配される。第1土塁遺構では2棟の建物柱穴から土器が出土している。4号建物は東西に主軸をもつ3×2間のもので、建物面積は約24㎡である。北東隅柱穴から完形にちかい土師質土器小皿1が出土した。小皿の口縁部のほぼ全周には、スス状の付着物がみられる。6号建物は南北に主軸をもつ3×2間のもので、建物面積は約22㎡である。東側柱列の南から2番目の柱穴より土師質土器小皿1が出土した。第5土塁遺構では1号建物の柱穴から土器が検出されている。1号建物は東西に主軸をもつもので、東西4間、南北2間以上の規模を有する。口縁部の一部を欠いた土師質土器小皿が1点、南東隅の柱穴から出土している。

・古庄屋遺跡 建物1、建物4、建物6、建物7の柱穴から完形の土師質土器坏、小皿が出土している。建物1と建物6は13、14世紀代、建物4と建物7は15、16世紀代である。

3 土器祭祀遺構の検討

前段では、大分県内における古代・中世の土器祭祀遺構をⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類に分類して整理した。ここでは、これら各類がどのような性格をもつかを考え、さらに各類のなかでのバリエーションや時代的な差異などについてみていく。

(1) Ⅰ類

Ⅰ類として分類した上牧ノ内Ⅰ遺跡と虫喰谷遺跡は丘陵の中にあり、通常の集落でないのはもちろんのこと、周辺にも集落があったとは考えられないところである。これら遺跡の立地する松岡丘陵は、国府や大分郡衙の存在する大分川下流域の東側にある。松岡丘陵東側には海部郡へと続く大野川下流域の平野がみられ、丘陵は、両平野すなわち大分郡と海部郡をつなぐルート上にあり、大きな意味での境界をなす。道に係わる祭祀行為に加え、国府や郡衙を鎮護するための祭祀行為、あるいは宗教的な意味合いをもつものであった可能性も考えられよう。以上のようにⅠ類は、通常の集落の外にみられるもので、屋敷地の地鎮というような個々の屋敷レベルを越えた単位での祭祀行為であったと考えられる。大まかに言えば、地域単位の祭祀として捉えることができる。今回は、土器を埋納する虫喰谷遺跡と土器を安置する上牧ノ内Ⅰ遺跡を、同様な性格を有する遺跡として考えてきた。しかし、埋納と安置の違いが祭祀の目的などに大きな違いをもつものなのか今後の検討が必要と思われる。

時代的な観点からみると、類例は少数ながらも古代前半に位置付けられるものである。よって、少なく

とも大分市松岡丘陵では古代前半に盛行した祭祀行為で、古代後半以降は行われなかったと推定される。律令体制の盛期のみにみられるという時代的な流れを考えると、松岡丘陵での祭祀行為は古代律令体制と大きく係わるものであった可能性も否定できない。すなわち、律令体制下に特有な思想を背景に行われた祭祀であることが考えられる。しかし、その場合でも出土遺物が坏や小皿などに限られることから、国府や郡衙が直接的に係わったものであるかは疑問である。

(2) II類

II類については、古代から戦国期に及ぶものが認められる。これらについては、屋敷内での位置やその形態にバリエーションがみられることから、時代的变化や祭祀形態そのものに差異があるとも考えられるが、地鎮など大まかに屋敷の祭祀に係わるものとして理解される(註18)。以下、その内容を検討していく。

使用される土器の量についてみると、久末京徳遺跡や信重遺跡、古市遺跡のように古代では数十個に及ぶものがみられるなど、時期が上につれ使用される土器の量が多い傾向にある。この傾向は六田遺跡や深水邸埋納遺跡のように中世前半までは残るものの、中世後半になると猪野中原遺跡、小路遺跡、古庄屋遺跡などのように使用される土器は十個体以下に落ちていく。加えて、土器の種類についてみると、古代には坏などの供膳土器に加え壺や甕もみられるが、中世以降は基本的に供膳土器のみになる。使用される土器の量や種類が時代により異なってくることから、具体的な祭祀の形態や方法に変化があったものと理解される。

次に、遺跡内における遺構の配置をみる。古代の久末京徳遺跡や信重遺跡では建物をコの字状配置した中央の空間部にみられるという共通性を読み取ることができる。このような明確な特徴は、遺構の性格を考えるのに示唆的である。これに対し、中世のものは明確な傾向をつかみにくく、配置についてはいくつかのバリエーションがあるようである。すなわち六田遺跡、植田市遺跡、猪野中原遺跡、古庄屋遺跡では、屋敷地の隅近くに配置される。この場合、中世前半の六田遺跡では東南隅に、中世後半の植田市遺跡、猪野中原遺跡、古庄屋遺跡では北西隅近くに配置されるものがみられる。また、屋敷の中央に配置されるものとして、猪野中原遺跡と久住町の小路遺跡がある。猪野中原遺跡のSX050は屋敷中央付近に配置され、土壌に土師質土器5点を十の字状に配し各々に銭貨を3枚ずつのせるなど、他に比べ定式化した様相が認められる。

また、このような土器祭祀遺構のみられる遺跡は、古代・中世を通じて上位階層の屋敷と推定されるものばかりである。よって、これら祭祀行為は各時代とも上位階層と密接に係わり行われたものと考えられる。

以上からII類は、(1)古代、(2)中世前半、(3)中世後半の各段階に分けて整理することができる。(1)では上位階層の屋敷の中央空間部に配される傾向にあり、使用される土器は数が多く、供膳土器に加え壺や甕も使用される。(2)でも上位階層の屋敷で行われる。使用される土器は多いが、供膳土器のみになる傾向になる。配置される場所も屋敷地の隅にもみられるようになる。(3)の段階も引き続き上位階層の屋敷でみられる。使用される土器は坏、小皿などの供膳土器のみで、量も十個体以下になる。屋敷内での位置は中央であったり、隅近くであったりする。隅近くにあるものは北西隅近くにあるものが多い傾向にある。また、単に土器を集めて埋納したのではなく、明確な意味をもち意識的に土器を並べるような定式化したものもみられる。

(3) III類

掘立柱建物を構成する柱穴からの出土が明確に報告された例は意外と少ない。また、報告されたものでも柱穴の埋土から出土したのか、抜き跡から出土したのかが明らかでない。そのため、柱穴出土の土器が掘立柱建物の建築時の祭祀行為なのか、廃棄時の祭祀行為なのかを明確にすることができない。いずれにしても完形の土器が柱穴内から出土するということは、偶然ではなく意識的な埋納であると考えられ、掘立柱建物に係わる祭祀であったものと理解する(註19)。

類例が少ないが、現状では古代のものは確認されていない。古代における掘立柱建物に係わる祭祀の状況は、今後の資料の増加をもって判断したい。今回確認されたものは中世のもので、埋納された土器は数個体以内で、大部分が土師質土器の坏や小皿である。これらが確認された遺跡はII類のように上位階層の屋敷地のみでなく、中位階層や山城でも認められ、III類の祭祀行為がII類よりも広い階層で行われていたことが分かる。また、建物

の規模については、大規模なもののみにみられるというようなことはないが、各遺跡とも遺跡の中において規模の大きな建物が含まれる傾向が認められる。

4 おわりに

小稿では大分県内の土器祭祀遺構について、管見のもののみを取り上げて検討を行い、その概要を述べた。資料に漏れがあると思われるが、稿を改めて銭やその他を含む祭祀遺構とも併せて検討を行いたいと考えている。また、今回取り扱ったものとは別に、土器を一括して廃棄したと思われる遺構もみられる（註20）。遺構は土壙や溝などであったりするが、厳密には本稿で扱ったものと区別するのが困難なものもある。加えて、廃棄されたものでも一連の祭祀行為の中、あるいは祭祀行為後の廃棄だった可能性を有するものがあることを考えれば、このような遺構の位置付けについても考えていく必要があろう。

註

- (1) 森 郁夫「古代の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
木下密運「中世の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
水野正好「近世の地鎮・鎮壇」『古代学研究』28・29 1984
- (2) 久世康博「平安京の埋納遺構」『考古学論集』3 1990
嶋谷和彦「地鎮めの様相」『関西近世考古学研究』Ⅲ 1992
- (3) 山元敏裕「古代から中世にかけての土器埋納遺構」『香川考古』6 1997
降矢哲夫「博多遺跡群における地鎮め遺構について」『博多研究会誌』8 2000
- (4) 甲斐寿義『上牧ノ内Ⅰ遺跡』スポーツ公園内遺跡群発掘調査報告書 大分県教育委員会 1999
- (5) 後藤一重『虫喰谷遺跡』大分県教育委員会 2001
- (6) 松本啓子『久末京徳遺跡』安岐町教育委員会 1991
- (7) 後藤一重『香々地の遺跡』Ⅰ 香々地町教育委員会 1994
- (8) 宮内克巳・後藤一重『田村遺跡・池在遺跡・古市遺跡・一万田遺跡』朝地町教育委員会 1994
- (9) 金田信子・永松みゆき・藤本啓二『六田遺跡・前田遺跡・秋国遺跡・外園遺跡』国東町教育委員会 1997
- (10) 村上久和・吉田寛『三光村の遺跡』三光村の遺跡 1989
- (11) 後藤一重『香々地の遺跡』Ⅱ 香々地町教育委員会 1995
- (12) 吉田寛『植田市遺跡』大分県教育委員会 1994
- (13) 塩地潤一『猪野・中原遺跡』大分市埋蔵文化財年報8 大分市教育委員会 1997
- (14) 後藤一重『小路遺跡 上屋敷遺跡』久住町教育委員会 2000
- (15) 染谷和徳『瀬戸墳墓群 瀬戸遺跡 帆足城跡』大分県教育委員会 2000
- (16) 小林昭彦『中津市伊藤田地区遺跡群』大分県教育委員会 1987
- (17) 渋谷忠章『伐株山城跡』玖珠町教育委員会 1984
- (18) Ⅱ類については屋敷に係わる地鎮などの祭祀であるとしたが、なかには掘立柱建物に近接してみられるものもあり、一部は個々の掘立柱建物に対する祭祀であった可能性もある。その場合はⅢ類と同じ性格をもつものとなるが、現状ではⅡ類の中を区別するのは難しい。
- (19) Ⅲ類としたもののほか、掘立柱建物を構成しない柱穴から完形の土器が出土する場合が確認される。今回はこれらについては全く触れていない。このような柱穴が本来的には掘立柱建物を構成するもので、調査において建物を復元するにいたらなかっただけなのか、もともと建物を構成するものではなく土器埋納用に柱穴状の深い遺構を掘ったものかは判断しかねる。
- (20) 例えば、宇佐宮弥勒寺にみられるSK3、SK4、SK5、SK6などの遺構がこれに相当するものと思われる。
甲斐忠彦・真野和夫・宮内克巳・後藤一重『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989